
angolmois

ちょりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

angolmois

【Nコード】

N4420H

【作者名】

ちよりん

【あらすじ】

普通の生活を送っていたのに、ある人物に会ってからの日々は今までとは全く違ったものになってしまった。一九九九年の七月の終わり。ノストラダムスという人が預言した『世界滅亡の日』

プロローグ

『少年』はその朝、インターホンの音で目を覚ました。

早朝とは言えないが、決して遅くはない時間での来客訪問。

面倒ではあるが、出ざるを得ないのは仕方のないことである。

電話で出る習慣を持っていなかったために、直接玄関のドアを開ける。

「……はい」

寝起きであるために声からは覇気は感じられない。

『少年』は扉の向こう側にいる人物の顔を確認する。そこには会ったことのない“少年”が立っていた。

その“少年”は『少年』と同じくらいの年齢のように見えた。見た目からはそう見えるが実際の年齢は不詳である。

「うちに何か用ですか？」

まだ覚醒しきっていない頭で質問をする。客人の方から用を言うてこないというの中々に失礼だとは思いますが……。

「おめでとうございます。貴方は審査の結果、見事当選致しました」
「……………」

『少年』は何を言っているのか理解できていなかった。

それもそのはずである。何も懸賞に送っていないというのに、いきなり「当選しました」というのは色々と変である。

そんな『少年』の心境を把握したのか、“少年”は、

「ああ、気にしないで下さい。これは応募とかは元々ないんですから、身に覚えがないのは当たり前ですから」

「……………」

益々不審に思ってしまう。

応募がないものののに、抽選があるということは勝手に無作為に行ったということなのだろう。

そして『少年』の頭の中で一つの解答が浮かび上がった。

「新手の詐欺なら、警察に訴えますよ？」

「いえいえ、決してそんな事ではありません」

これ以上付き合っていると訳が分からなくなってしまう。

「意味が分かりません。帰って下さい」

漸く覚醒^{ようや}しだした頭で今出来る最善の行動を考えつき、ドアを閉めようとした。

閉じている途中で“少年”は言ったような気がした。

「今は分からなくても、すぐに分かります」

ドアを完全に閉め切ったところで、安堵の息をついた。

完全に目が覚めてしまったので、これから二度寝をする気にはなれなかった。

テレビをつけてワイドショーでも見ることにする。

『少年』は休みのときには大抵、昼頃に起きる。それなのに現在は九時過ぎ。起きたのは恐らく九時前だろう。

そう考えているとさらにさっきの“少年”に腹が立ってしまった。

だが、それはすでに過ぎた事。もう会うことはない。

だから、忘れよう。

そんな事を考えながらテレビを見ると、左眼に軽い痛みを感じた。

睫毛^{まつげ}でも入ったのかと思い、洗面台へと向かった。

鏡を見た瞬間は何が起きているのか理解することが出来なかった。眼が紅い。

ただそれだけの出来事だというのに……。

充血とは違う。充血なら白い部分が紅くなるはず。

なら、黒いところが紅くなるというのは何なのだろうか？ そんな病気の類は聞いたことがない。

『少年』は気味が悪くなったので、急いで病院に向かうことにした。近くの病院にはそんなに行ったことがないが、記憶が間違っていなければ総合病院のはずである。近くに眼科はないのでその病院に行

くしかなかった。

記憶は正しかった。

受付で診察の予約をし、呼ばれるまで椅子に座っていることにした。

総合病院であるためか施設内は広い。近所にこんな立派な病院があることに感謝したいくらいだ。

夏休みであるためか子連れの人が多かった。まだ遊び足りないのか、病院であるにも関わらず子供は無邪気に走り回る。

『少年』はその光景を見て幾つか考えてしまった。

五月蠅い。

ウザい。

騒がな^{しつけ}ってない。

決して「子供だから仕方がない」という考えは出てこなかった。目の前に来たら殴ってしまいうまくないの感情が渦巻いていた。

いつしかその子供は母親らしき人に叱られていた。

(叱るならもっと早くにやれ……)

『少年』は負の感情で満たされている。

あの“少年”の所為なのかはわからない。今の子供の所為なのかもわからない。

ただ自分がこんな事しか考えられていない事に驚いている。

「〇〇〇〇さん、十二番の診察室に入って下さい」

自分の名前が呼ばれたので椅子から立ち、子供を横目で見ながら診察室に向かった。

診察室に入るとそこには初老の男性が机に向かって何かを書いていた。

『少年』が入ってきたことに気付き、体ごとそっちに向ける。

「今日はどうされましたか？」

一日にこの言葉を一体何回言うんだろうか、と考えながらも『少

年』は答えた。

「今朝、気が付いたら左眼が紅くなっていました」

医者はそれを聞くなりすぐに『少年』の左眼を見た。

机の引き出しからペンライトを取り出し、光を眼に当てたり外したりする。

「ああ……、そう、ゴホッ、ですね……。ゴホッ……。ゴホッ」

次第に咳の回数が増えていく。

もはや何を言っているのか聞き取れない。

「ゴホッ！　ゲホッ！」

言葉はなくなり、咳だけになった。

「ゴホッ！　……ア、ア！」

咳までも無くなった。

苦しいのか両手を首に宛がい、酸素を求めているようだった。

そして……。

ドサッ……。

椅子から落ち、床に倒れた。

恐怖で『少年』は椅子から立ち上がり、診察室を走って出て行った。

第一話(1)

今年は一九九九年。ある賢人によれば、今年の七月末に恐怖の大魔王が降臨し、世界を滅亡させてしまうらしい。

けれど、今は九月。夏休みが終わり、二学期が始まろうとしていた。

そう、この賢人の予言は外れてしまった。ついこの前までこの話題で盛り上がっていたのに、いざ、過ぎ去ってしまえば、マスコミも取り上げることはなくなってしまった。

過ぎた頃―――八月初旬の番組では、予言書の暗号解析が間違っていたり、ある国では西暦をとっておらず、まだ一九九九年ではないというところがあるなど、外れてしまった『言い訳』の内容をやっているところがあった。しかし、今では誰もそんなことに興味はないだろう。

学校の校門が近づいてくる。

朝月桜は夏休みでも、毎日学校に来ていたが、いつも部活のメンバーにしか会ってはいなかった。なので、少しだけ昨日からワクワクしていた。ちょっと幼稚っぽい表現かもしれないけど、これが一番しっくりくる気がする。

部活のとき以外でも遊びに行くのに、他の友人と会うこともあった。でも、そこには友達しかいない。思春期真っ只中の女の子にとっては男の子との交流には興味がある。だから、久々の男友達に会うのが少し楽しみなのだ。

別に好意を抱いている男の子がいるわけではない。そう考えてしまふと少し寂しい、だとか悲しいと思ってしまう。

校門に入ろうとしたところで、友人の磯辺茉奈香いそべまなかに後ろから肩を叩かれた。

「おはよ、桜」

茉奈香とは夏休みの間は部活で会っていたので、久しぶりではない。そもそも、昨日も会っていた。

毎日、会っているのにも関わらず会話が尽きないのは、やはり仲がいい証拠なのか。それとも女であるが故の語学能力の賜なのか。恐らく前者だと桜は思う。

教室に着くまで、二人で他愛のない話をする。それでも、それは楽しいもの。

教室に入るといつものメンバーが話していた。桜と茉奈香は自分の机に鞆を置いて、そのメンバーのところに行った。

「久しぶり」

「お、久しぶり」

桜は軽く手を振りながら友人たちに久々の挨拶をする。

その挨拶に最初に応えてくれたのはこのクラスの委員長こと中村啓祐^{なかもら けいすけ}だった。

「桜にしては少し遅めかな？」

右手を腰に当て、副委員長の白井由美^{しらいゆみ}が言った。

毎日、部活があったとはいえ、始まる時間は授業のある日よりも遅い。その習慣が抜けていなかった所為なのか、今日は少し寝坊してしまった。その甲斐あってか、この時間にいつも来ている茉奈香と登校することが出来た。結果オーライというものかもしれない。グループに近づき、いつもと違っていることに気が付いた。

そのグループの一人の少年――天野一輝^{あまのかずき}が左眼に眼帯をしていたのである。

「あれ？ 左眼どうかしたの？」

「ああ、ちょっと転んでさ。ぶつけちゃったんだよ」

ははは、と軽く笑いながら一輝は桜の問いに応える。「ポケットに手をつっ込んだ」と付け加えた。

「手は出しとかないと駄目だよ？ 危ないんだから……」

つつい、いつもの癖で注意してしまう。心配して言っているのだが、周りからは『世話焼き』だと思われるんじゃないかと思

っている。

時間ギリギリに着いたので、そんなに会話することなく終了してしまった。担任の先生が入ってきたからだ。

特に急ぐことなく自分たちの席に戻っていく。それでも、静かになることはなく、周りの近くにいる人と話している人が殆ど。

「夏休みは何かしてたの？」

桜もそのうちの一人。

後ろの席の一輝に話しかける。

一輝と桜はバイトが同じで夏休みでも会う機会は多かったが、シフトの関係かプライベートな会話は殆どしていなかった。なので、一輝と話すのは意外と久しぶりになる。

「いや、特に何もしてないよ。バイトくらいじゃないか？ どこにも出掛けてないし」

教卓の前では先生が何やら話しているようだが、一輝は全く気にもせずに桜の質問に応えた。ホームルームのときに会話をいっている先生は特に怒ることはない。幾らか五月蠅くなると注意をする程度。

「そうなんだ。じゃあ私と同じなんだね」

自分と同じ境遇の仲間がいたと思うと少しばかり安心する。

長い夏休みだったというのに、バイトしかしていないのだから、青春の一欠片も感じられない。そんな悲しい夏休みを送っていたのが自分だけではないと分かったのでどこかで安心感が生まれたのだろう。

気が付くと担任は教室からいなくなっていた。担任の声はそれほど大きいものではないので聞く耳を持っていなければ聞き取りにくい。

「四〇分までには体育館に移動してるんだぞ？ お前ら殆ど、聞いてなかっただろ？」

啓祐が教卓の前で叫んでいた。誰も先生の話を聴いていなかったのを予測した行動なのか、先生の『代わり』に言ったのだろう。や

はり、一応“委員長”ではある。

四〇分までと言っても今は三五分。それほど余裕がある時間ではないので、教室の端々から徐々に出て行っている。

「じゃ、あたし達もそろそろ行こっか？」

由美がみんなに告げた。そんなに不真面目ではないからなのか、副委員長という肩書きの所為なのかはわからないが、二学期最初の行事に遅れてしまうのは如何せん、いけないことだと思ってしまう。この五人のメンバーは話しながら、ゆっくりではあるが、予定の時間に着くように体育館へと向かっていった。

体育館に着くなり啓祐は走り出した。

「やべ！ 整列しないといけねえんだった！」

「あ、あたしもやらないと！」

啓祐の言葉を聞いた由美も同じく走っていった。

走り出したのはこの二人だけで残りの三人は急ごうという素振りすら見せない。

啓祐と由美が仕事に走っていったのに、三人とも全く急ごうとしないのは、自分たちが教室を出たときにはまだ残っている人がいたから、整列が完全に終了するのはまだ先のこと、だからである。

自分たちのクラスの列に並び始めて五分くらいたった後に整列が完了した。

桜は「お疲れ様」と二人に思った。

決して纏まりがないクラスではあるが、やはりまだまだ遊びたい時期である。ルールに則って時間通りに動く生徒ばかりではない。それはこのクラスに限ったことではなく、他のクラスでもそうなのだが、一人でも遅れるとその責任はやはり委員長、副委員長にある。一人でも遅れてくるとその度に列は、微妙ではあるが乱れてしまう。そのためにもやはり時間はせめて守るようにしないといけない。

全クラスの整列が終わったようなので漸く、始業式が開始された。
開演の挨拶があったあとすぐに校長の話が始まる。

これは恐らくどの学校でも同じことなのだろうけど、こういう式の
ときの校長の話は非常に長い。

きっと誰もこの話を聴いている生徒なんていないだろう。

それは桜も同じである。

聴いていないので呆けている人やケータイを弄くっている人など、
色々な人がいる。ちなみに校則で校内でのケータイの使用は禁止さ
れている。

桜もその内の一人だった。

桜は考え事をしていた。

先々月末に大魔王が降りてくるという予言。

たしか、その魔王には名前があったはず……。

それを考えているときに同時に「私も不真面目なんだな」と思っ
てしまう。

そうして暫く考えていると、その答えが出た。

（ああ、そうだ。アレの名前はたしか——）

angolmois……。

第一話(2)

入学式や卒業式とは違い、始業式は早く終わる。しかし、式は終わってもその後には夏休み中にあった部活動の試合の表彰が行われる。

桜たちの通う清嶺学園^{せいりょう}は県下でも上位に入る程の強豪校。ジャンルを問わず、あらゆる部活が入賞している。今回もまた幾つもの部が入賞していた。

サッカー、野球、バレーボール、柔道、剣道、以下多数……。

運動だけでなく、頭の方もこの学校は上位の方に位置する。全国模試では毎回、全国十位以内に入っている生徒が一、二人いる。

所謂^{いわゆる}、『文武両道』というやつだ。

その証拠に、体育館の正面左側には誰が書いたのか不明だが、大きく達筆で「文武両道」と書かれている。恐らく、書道の世界では有名な人なのだろう。素人目に見ても達人が書いたと判る。

桜は意外にも校長が書いたのかも、と思ってしまうたがそれは無いだろうと自己完結をした。

もしかしたら、始業式よりも表彰式のほうが長かったかもしれない。それほどの入賞者がいたということだ。

桜の部内——陸上部でも将来有望な生徒はいる。その実績で大学からスカウトされ、そのままスポーツ推薦という形で大学に行く人もいる。

だが、自分は決して「それ」の中に入っていくとは思えない。平凡な女子高生が殆ど趣味で入った部なのに、将来そうなるとは考えられなかった。寧ろ^{むしろ}、こんな理由で部に入ってしまったので、周りのみんなに迷惑を掛けているのではないかと思っていた。

いつだか、そのことをみんなに話したが、肯定する人は出なかった。「みんな仲間なんだからそんな風に思ってる人なんかいない」

というのが回答だった。

その答えに桜は涙したのをよく覚えている。その御陰で部活に集中できるようになった。

教室に戻つてくると、またいつもの五人組で話すことになった。

「始業式よりも表彰式の方が長いっていうのはどう思うよ？」

開口一番に言ったのは啓祐だった。

啓祐は委員長だったが故に、列の先頭で呆然と式を眺めていた。先頭だったために、何も出来ずにこうすることしか出来なかった。先頭より離れた、後ろの方や中の方では小声で会話をしている人がいた。その人たちにとっては面倒臭いイベントだったにすぎないだろう。

けれども先頭に立っていた啓祐にとって、これは軽い拷問だった。何もすることが出来ないのだから拷問以外の何物でもない。それ故の愚痴だ。

「仕方ないじゃない。入賞者がいっぱいいたんだから。寧ろ喜ぶところじゃないの？　そうそう入賞出来るもんじゃないんだし」

啓祐の愚痴に軽く由美は応える。

「そうだけどさ。俺は全然嬉しくないんだヴォッ！？」

啓祐の奇怪な声が教室に響き渡る。何事かと、教室にいた生徒が音源に振り向いたが、「いつものことか」と呟きながら、していた作業に戻っていった。

「ゆ、由美さん……？　そこは……鳩尾みぞおちつてどこ、です……よ？」

「あら、そんなこと知っているわよ？　委員長？」

由美の右手はいつもの如く、啓祐の急所を突いている。

啓祐の口からはいつもの如く、呻き声が漏れている。

一瞬の間を置き、啓祐は床に倒れた。

「男なら愚痴は零さないの！」

啓祐に意識があるのかないのか不明だが、他の三名は無事を祈ることしか出来なかった。

教室に戻ってきてからホームルームまでの時間はそんなになかった。

まだ二学期初日ということもあってか授業はない。このホームルームが終わってしまったえば、今日の学校行事は終了となる。

担任が「明日、席替えをする」と言い、それだけが報告だけだったらしく、一瞬の内にホームルームは終了した。

普通ならばこの後、部活があるのだが、今日に限っては顧問の先生が用事があるらしく自主トレもなしになっている。

桜たちの部活――陸上部は週三日。月、水、金だけが本来の活動日である。それ以外の曜日は基本的にはないが、各自が自主的にトレーニングをすることが出来る。あくまで学生の本業は勉強にあるため、学校側はそれほど部活動に力を入れようとはしていない。生徒の自主性を尊重している。それにも関わらず大会で多くの入賞者が出るのは生徒個人の賜たまものだろう。

桜は活動日にしか出ず、それ以外の曜日はバイトに行くことにしている。

「桜。今日、部活ないの知ってるよね？」

由美が茉奈香を連れて桜の席に来た。

「うん。知ってるよ」

「じゃあさ、遊びに行かない？」

「ごめん。今日バイト入れちゃった」

両掌を合わせ、謝る。いつもなら部活があるのでバイトは入れないのだが、部活がないことを事前に知っていたため、バイトを入れていた。遊び盛りの女子高生としてはお金は必要である。

「そうなんだ……。じゃあ、また今度だね」

由美は心底残念そうに応えた。

「うん、そうだね。私は別にいいから二人で遊びに行ってきたよ」

「なんか、悪い気がするけど、桜がそう言うなら……」

「うん。行ってらっしゃい」

桜は由美と茉奈香を手を振って見送った。

「さてと。バイトに行かないと」

鞆に机の中の道具を入れ、教室を出て行った。

今思えば、せめて校門までは一緒に帰れば良かった。

(そういえば、一輝くんも今日バイトが入ってたはず)

それを思い出し、一輝と一緒にバイト先まで行こうと思い、教室に一輝がいるか確認をする。見回すと一輝は帰り支度をしているところだった。

「ねえ、一輝くん。今日バイト入ってたよね？一緒に行かない？」

「ごめん。今日は病院に行く日なんだ。その後から行くんだけどさ」

桜は「そっか」と洩らし、教室から出て行こうとした。

「病院までは同じ道だから、そこまでなら一緒に行こうよ？」

教室の出口の方を向いていた桜は、再び一輝の方に振り返った。

そして、桜は嬉しそうに頷いた。

二人きりで帰るのは初めてじゃない。二人ともバイトが入っている日は大抵一緒に行くようになっていた。誰かが決めたのではなく、自然とそういう風になっていた。

けれども二人は付き合っているわけではないし、お互いに好意を抱いているわけでもない。ただ『親友』と呼べる仲というだけ。“二人”だけではない。由美や茉奈香、啓祐とも『親友』だ。彼らはそんなに長い付き合いではない。由美と啓祐はいとこ同士なので、小さい頃からお互いのことを知っているようだが、他はそうではない。皆、学校から近い所に住んでいるのだが、小学生の頃から微妙に学区が違っていたため、出会うことは無かった。皆が皆、同じ高校に進学したためにこうやって出会うことが出来たのである。

「その目の怪我って、どれくらいで治りそうなの？」

余計なお世話かもしれないが、つつい聞いてしまう。こんなことを聞いたら嫌がるかもしれないと思いつつも……。

「今月中には治るってさ。そんなに大した怪我じゃないし」

聞かれた本人は嫌がる素振りには微塵も見せずに応えてくれた。桜は内心でホッとした。もしかしたら、自分の“こういう考え”が余計だったのかもしれない。

「桜とはそんなに長い付き合いじゃないけど」

「え？」

予想していなかった内容だったのでつい、一輝の顔に向いてしまった。

自分よりも背の高い少年。そんなに背は低くないけれど、女の子が男の子に身長で勝ることは殆どない。自然と顔が上がってしまう。

「いつも皆の心配してくれるよな。そういうところ……、何ていうか、いいと思うよ」

「そ、そうかな？」

普段は見ない横顔の所為なのか、急な言葉の所為なのかはわからないけれど、なぜかドキリとしてしまった。もしかしたら、鏡を見たら顔が赤くなっているかもしれない。そんな気がしてしまった。

「じ、じゃあまた後で。もしかしたら遅れるかもしれないから、店長に伝えといてくれるかな？」

「え？ あ、うん。わかった。また後でね」

知らぬ間に病院の前まで来ていたようだ。

学校からはそんなに短くはないのに、案外早く着いてしまったような気がした。まだ、半分くらいしか歩いていないと思っていたのに……。少しだけガツカリしてしまった。

時計を見るとまだ時間には余裕があったので、ゆっくりとバイト先であるファミレスに歩いていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4420h/>

angolmois

2010年10月10日16時29分発行